

オセアニア船旅 2018④

【南太平洋編】



2018年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

オセアニアの船旅を2018年1月8日～3月4日の56日間で行ってきた。その旅行記は既に東南アジア編、オーストラリア編、ニュージーランド編を発表してきたが、今回は横浜帰港まで最終の南太平洋編としてまとめた。

第一章 天国に一番近い島

■ニューカレドニア上陸

2月19日ニューカレドニアのヌーメアに寄港する。そして当初の予定より3時間遅れの接岸になる。理由の一つはミルフォード・サウンド直前のリトルトンへの検疫で1日遅れたことだが、もう一つはオークランドからニューカレドニアに向かう途中で大型のサイクロンとの遭遇に対して少し迂回したためだ。

この島は森村桂の小説「天国に一番近い島」によって日本で有名になった。そして旅行会社のパンフレット等では信じられないくらいきれいな海を紹介している。私たちがそのきれいな海を満喫するために小さな島に渡ってシュノーケリングを考えていたが、残念ながら目的の島へのフェリーは朝早く出てしまった。余儀なく別のところを探すのだが、この綺麗な海ではシュノーケリングは外せない。

ダック島という近くの小島と循環型観光バスの組み合わせで20US\$というのがあり、これにしようと同賛同する。

ここで今日のメンバーは84才になったNさん、彼の友人TさんとIさん、英語のできる37才Eさん、そしてEさんが連れてきたのはベルギー人のPさん、そして私たち夫婦の7人だ。

ベルギー人のPさんはドイツ生まれのベルギー人でヨーロッパの言葉は全て話し、更に日本語も堪能という頼もしい人だ。年齢は70代かと思われ、元外交官という経歴をEさんから聞く。こんな人が船に乗っているとは初めて知った。

ここニューカレドニアはかつてフランスの海外領ということで言葉はフランス語だ。本国フランスはユーロなのに通貨はフレンチ・パシフィック・フラン（CFP）というややこしい名前の通貨を使用している。ただオーストラリアドル、NZドル、USドルなども観光客相手の商売では流通している。

そして街に行く自動車も様変わりしている。今まで回った国々は日本車が多かった。特にオーストラリア、ニュージーランドは圧倒的だった。ところがニューカレドニアはやはりフランス車が多く、そしてEU圏内の車も多い。多分輸入関税がかからないのだろう。

この島はなんといってもエメラルドグリーンに輝くサンゴ礁の海が特徴で 2008 年世界自然遺産にも登録されている。そしてこの南の島にはフランス文化が気品と華やかさを加えている。だから「天国に一番近い島」と呼ばれても違和感がないのかもしれない。

フランスのリゾート地という景観の街を抜けてきれいなビーチに出る。このビーチから水上タクシーでダック島に渡ると、海の美しさは更に増して素晴らしものになっていく。白い砂浜はサンゴの欠片がたくさんちりばめられ、近くで見ると透き通るような海の水は少し離れるとエメラルドグリーンへと変化していく。その色が変わるあたりから深くなっている。



皆シュノーケリングを楽しんでおり、私も海に入る。シュノーケリングは大学時代に沖縄西表島に行ってから始め、しばらくの間楽しんでいたが、今回は 20 年ぶりくらいになる。

久しぶりの海中散歩をしていると小さな魚の群れや大きな魚もいる。ただそんなにたくさんはいない。海底にはサンゴもチラホラ見えるがナマコも結構多い。

この島のこのポイントだけでの話で誠に恐縮だが、魚は小笠原諸島の方が多くて変化に富んでいる。そしてサンゴは沖縄西表島の方が種類も多く、大きい。

外から見ている海と、海の中の実態とでは随分と異なる。世の中にはよくある話だ。

島は5分も歩けば一周できる広さの無人島で、標高は5mくらいだろうか小皿を逆さにひっくり返したような形をしている。適度に木々が生い茂り、赤いビーチパラソルもアクセントになっている。いかにもヨーロッパ風のリゾート地で、島の真ん中にはおしゃれな南国風レストランがある。



私たちはレストランのテーブルに陣取り、私はサンドイッチとビールを注文する。サンドイッチといっても大きなフランスパンを横に切ってハム、チーズ、トマト、葉物野菜を挟んだすごく細長いもので、独特のソースで味付けしたもので実に美味しい。

ベルギー人のPさんがフランスパンを皿に山盛りに持ってきて、タダだから食べろと皆に勧める。皆はきょとんという顔をしていると、Pさんは「フランスではパンは無料が当たり前だ」という。そしてケチャップやマヨネーズを付けて食べ始める。ケチャップもマヨネーズもタダだ。このPさんは、ただものではない。学生時代はフランスにいたらしく、金がない時はタダのパンで飢えをしのいだともいう。

元外交官がリゾート地でタダ飯とは、と皆が思っていたところ彼が注文したメインディッシュが来たので皆一安心する。大きな皿いっぱい野菜や魚貝類、肉の盛り合わせに独特のソースが付いている。



私たちはその量にまた驚く。欧米人はたくさん食べるとは知ってはいたが、細身の 70 代の後半だろうというこの人が全部食べるとは思えなかった。タダで持ってきたフランスパンもいくつか残っている。彼は午前中泳いだのでエネルギー摂取が必要だからと言いながら 30 分程かけて全部食べてしまった。

ヌーメアの市街地の散策をするが、教会や公園なども整備されている。さすがにフランス領というだけのことはあり、今まで見てきたいわゆる南の島のリゾート地の中では群を抜いている。



出航間際の夕陽についても圧巻だ。太陽の大きさは何処で見ても変わらないはずだが、久しぶりに大きな太陽を見ることができて幸運だ。



■オセアニ家 植菊

今日から菊千代一門約 30 名の稽古が始まる。

まずは高座名を付けてもらう。私は植菊という名をもらう。そしてあくまでも船上での一時的な弟子なので古今亭という亭号は名乗れずに亭号を考えることになって、弟子たちの総意で今回のオセアニアクルーズにちなんでオセアニ家という亭号を名乗ることになった。

本日の稽古は発声練習そしてなぞかけだ。なぞかけは私にしては慣れたものだが、慣れていないおじさん、おばさんたちには辛いかも知れない。でもみんな和気あいあいとしている。

これから一週間後くらいには公演会があり、皆高座に上るのだが、大丈夫かと一抹の不安を感じる。

■スポーツ吹き矢

昨夜のレストランで一緒のテーブルになった夫婦がスポーツ吹き矢の自主企画をやっているというので、何かの縁と思いその企画に夫婦二人で行く。自主企画とはいうものの愛好者が集まった教室という感じだ。私にとっても妻にとっても初体験の競技だったが、面白そうだ。

1m くらいのプラスチック製の筒から吹いて矢を飛ばし、6m 程先の的に当て命中率を競う競技になっている。

特徴的なのは吹く前後の儀式にある。まず的に向かって礼をする。そして吹き矢の筒を持って大きく両手を揚げて息を吸い込み、降ろしながら息を吐く。もう一度吸い込んで吹き矢を吹く姿勢にして構えて息を吐き、矢を発射する。だからスポーツというよりも吹き矢道という感じがする。ついでに腹式呼吸で行うので健康にもよさそうな気がする。

この競技は敷居も低いし、お金もあまりかからない。うん、使えるような気がする。



第二章 ガダルカナル島

■ホニャララ

2月22日ガダルカナル島のホニアラに寄港する。ここホニアラはソロモン諸島という国の首都だが、私はこの国もこの都市も船に乗る前は知識が無く、船の中の紹介企画で知った程度だ。その企画で通訳していた女の子がホニアラをホニャララと訳したことが妻には面白かったらしく、夫婦の間ではホニャララと呼んでいる。

突き刺すような日差しがきつく暑い。暑いはずで、本日のこの場所で太陽が真上から照らすということが現象になる。正午頃に頭上から太陽光が射すので影がほとんど出来ないという滅多にないことを体験できる。

北回帰線と南回帰線の間を航行すれば太陽と船の位置、そして時間により遭遇するチャンスはあるのだが、今回のクルーズ前半は天気が悪かったので体験できなかった。そして本日は寄港日なので陸地で体験できる。

水筒を立てて地面に置くと影はほとんどない。北回帰線よりも北の日本では絶対体験できない。



そんな異国の暑いところが太平洋戦争の激戦があったとは非常に辛い気持ちになる。

日本軍は南方戦線の拠点としてガダルカナルに飛行場を建設していたが、完成直前に連合軍が上陸して飛行場を奪い、逆に飛行場を連合軍が使用できることとなった。この要衝を奪われた日本軍は奪還すべく大部隊を送り込み大激戦が繰り広げられたが、制海権や制空権を奪われて補給路を断たれた日本軍は多数の兵隊が餓死した。この島では2万人以上の兵士が死んだが、戦闘で死んだ兵士よりも餓死や病気で死んだ兵士の方が多いので別名「餓島」と呼ばれた。

■タクシーにはご用心

そんなこともあって、できれば慰霊にと思い戦跡に向かうべくタクシーを探す。いつものようにタクシーの呼び込みがたくさんある中、いろいろ交渉した末に220 ソロモンドル (S\$) で交渉成立する。私たちが乗り込もうとすると、運転手は車の屋根についたタクシーの標識をはずしている。磁石で簡単に取り付けてあったもので、どうもタクシーを装った白タクらしい。

一抹の不安を抱きながらタクシー旅行が始まる。そうそう本日のメンバーは84才のNさんに昨夜居酒屋で知り合った北海道のおばさん、私たち夫婦の4名だ。

車は走ると砂埃が舞い上がり、歩く人には申し訳ないと感じながらもやはり車は快適だ。所どころ舗装されているものの未舗装の部分には凸凹が至るところにあり、そんな場所にくると速度を落とさざるを得ない。Nさんが言うにはスピード制限用にわざとそういう場所を作っているのだという。しかし雨が降ったらこの凸凹はとんでもないことになりそうだ。

車は左側通行なので中古の日本車がそのまま走っている。マイクロバスには〇〇自動車教習所などと書かれており、日本の中古車をそのまま持ってきているようだ。

私たちの乗っているこの白タクもそのようで、カーナビは付いているが地図ディスクを入れて下さいという表示が日本語のまま出ている。運転手は何が表示されているかも知らないのだろう。

運転手の彼は 25 才独身、なけなしの金でこの中古車を買って観光客相手に稼いでいるのだろう。

最初に行ったのは小高い丘の上にあるアメリカ合衆国の記念碑で、周囲の海や街を一望できる場所なので景色も良い。戦績や作戦の説明などが石のプレートに刻まれている。



観光名所をいくつか回るが、私が戦跡に行きたいと言うと運転手は遠いと言って渋る。それでも 30 分程かけてアリゲータ・クリークという日本軍と連合軍が対峙した川に着く。爆破されたらしい橋の跡があり川は深い木々で覆われている。暑い中、こんなところで生死をかけて戦ったのかと思うと胸が痛い。



ガイドブックにはアリゲータ・クリークの記念碑があると書いてあるが、運転手はそんなものはないと言う。

レッドビーチという米軍が上陸した海岸の場所に連れて行けと言うと言うとまた遠いと言う。そう言いながらも金になるならと車を走らせる。するとUターンして街に戻り街の反対側に車を走らせる。どうもおかしい。この白タクの運転手は分かっていないらしい。

そしてまた15分くらい走り、着いたところは海水浴をする単なるビーチだ。ここはレッドビーチではないとNさんが激しく抗議すると運転手も不安になったらしく近くの地元民に聞いて、レッドビーチはここではなく先ほどのアリゲータ・クリークの近くだとようやく分かったらしい。

再度行くかと聞かれたが、街に戻り、マーケットの前で降ろしてもらおう。

当初の予想の2倍くらいの距離を走ったが、私たちは220S\$以上を渡す気分になれず、きっちり払った。彼も自分の失敗に納得したらしく金を受け取り、去っていった。

■地元のマーケット

マーケットは今まで寄港地で見えてきたマーケットの中で最も大きく、大きな屋根の下の広い空間は地元の人と現地の品物で溢れている。野菜、果物、穀物、魚は当たり前としても、服、油、そして薪に至るまで生活に必要な全てのものが売られている。品物の前には値札が置いてあるが価格交渉も出来そうだ。

マーケットの中をうろついていると日本人から声を掛けられる。「迷子になってしまったようで、こんな服装の人を見かけませんでしたか?」、当然知る由もないが、私は何となく場違いな場所に來てしまったなということに気が付き始める。このマーケットは観光客向けではなく現地の人々の生活を支えている場所だ。そしておそらく交流の場でもあるに違いない。

やはりガダルカナル島は日本人にとっては特別な場所かもしれないが、ここを訪れる観光客は極めて少ない。観光地ではない所を訪れるときはそれ相応の心構えが必要と実感する。



■フンドシの男たち

出航前には船の中で現地の人たちによる伝統的な歌と音楽のステージがある。別の島からフェリーで丸一日かけてやってきたという。

竹でできた笛のような楽器と、やはり竹を組み合わせた打楽器のようなものによるシンプルな音楽に歌を合わせた独特なものだ。そのステージはわずか30分ではあったが、今までにこの船で聴いた音楽では一番良かったかも知れない。



実はステージが始まる前が面白かった。私たちが10階のデッキで夕焼けを見ているとその下の9階のビュッフェレストランで夕食をとっている一団がいて、みんなフンドシーつの現地の人々が本日の夕食メニューの穴子の天井を食べている。半分くらいのお代わりをしているし、コーヒーを自分で取りに行く人もいる。その光景が実にユーモラスで楽しくさせてくれる。

この人たちがステージに上がるのだなと思いながら見ていたが、あの天井の味はどう感じているのだろうかなどと気を回してしまう。お代わりをするくらいだからきっと旨かったに違いない。



第三章 ラバウル

■ラバウル上陸

2月24日ラバウルに寄港する。ラバウルはパプア・ニューギニアの都市というよりも、旧日本軍の基地があったことで有名で太平洋戦争開戦後すぐに基地ができ、最大で9万人の兵士がいた。

今日はNさんと私たち夫婦の3人旅、暑い日になりそうだ。港を出るとたくさんの現地ツアーが呼び込みをしている。現地ツアーというよりも住民が自前の車で観光案内して稼いでいる。

私たちは2時間の観光名所めぐりで15US\$というワゴン車を選び、乗り込んだ。車はトヨタ車だが恐ろしくボロで、よくここまで使うなというくらいくたびれている。フロントガラスの運転席側はヒビが入っているし、後ろのドアも良く閉まらない。もちろんエアコンもない。それでもしっかり走るのだから日本の車は評判がいいはずだ。

この車は家族で運営しているようで、私たちの隣の席に40才のおばさんと7才の娘が座っている。いろいろなガイドもしてくれる。家庭的な雰囲気もして、ボロ車ではあるが暖かみを感じられる。

いや、暖かみではなく、灼熱の中でエアコンなしは本当に暑い。それでも車が走り始めるとさわやかな風が入ってくる。

■火山の噴火がもたらしたもの

最初に行ったのはラバウル飛行場跡で、旧日本軍が作り多くのゼロ戦がここから飛び立った場所でもある。戦争の後も1994年まで実際に使われていた飛行場で、1994年にすぐ近くのダブルブル火山が爆発したので灰に埋もれて使用不能になり、大部分はただ広い平原と化している。



飛行場跡の近くの海岸で温泉も湧いている。火山の熱で高温な湯が沸き出しているので海水と混ざり合って適当な温度のところで入浴できる。



温泉といってもシャワーや脱衣場がある訳ではなく、その辺で水着に着替えて入るというワイルドな温泉だ。目の前には噴火した火山があり、今でも少し白煙を上げている。ちょうど伊豆大島の三原山の火口のような感じだ。

この温泉も観光地と化しているので地元の人々が露天の土産物商売をしている。20~30 店くらい出ているという、なんとも不思議な光景だ。火山は飛行場を奪ったが温泉をもたらした。



ラバウル・カルデラ展望台に登る。ここからの眺望は本当に素晴らしい。ラバウルの街やラバウル湾が一望でき、先ほどの温泉や私たちの乗ってきた船も見える。青い海に緑の山、そして灰色の街並みや道路が面白いバランスで配色されている。

先ほどの温泉近くの 1994 年に爆発した火山やそれよりも昔に爆発した火山などたくさんの火山跡が見える。火山跡と書いた理由は、噴火口を備えた火山の形をしているものの山肌は露出していなく緑の木々に覆われた状態だからだ。



■山本五十六の残したもの

ヤマモト・バンカーという防空壕跡に行く。連合艦隊司令長官の山本五十六が南方視察で数日間過ごしたという場所で、地下壕になっていて狭い入口から階段を降りていくと部屋が 2 つある。地下 5m くらいだが、それなりにヒンヤリとして気持ちが良い。

壁には落書きがいくつか書かれている。最近になってから来た日本人のもので旧日本軍での階級や住所が書かれている。多分慰霊に訪れたのだろう。

入口近くには戦車、魚雷、機関銃などが 70 年以上の年を経て無残な姿で残っている。それらはこの防空壕にやってくる日本の観光客のために、雰囲気を出すために置かれているのだろう。ここで暮らす人たちの生活に役立っているということで改めて山本五十六という人物を思う。



■現地通貨で買い物

今朝、船内で 10US\$を現地通貨 30 キナ (K) に両替した。そして 20K は温泉とヤマモト・バンカーの見物料で各 5K を使い、都合 10K が手元に残っている。これを使うために買い物に行く。

マーケットが船の着いた近くにあるというので行ってみると、昔ながらの市場風の大きなマーケットが一つと近代的なスーパーマーケットの店舗が数店ある。

ここはラバウルの中心地らしく、多くの人で賑わっている。ガダルカナルでもそうだったが、マーケットは地元の人々の生活に密着している。とにかく多くの人でごった返している。

冷やかして寄っては見たものの、やはり買うものがない。昔は土産をスーパーマーケットで買うことが多かったが、今回の旅では土産は極力買わないようにしており、バリ島のスーパーマーケットでナシゴレンの素を買った程度だ。

このラバウルが今回のクルーズで最貧かもしれない。経済的な意味では最も貧しいと感じる。ただし貧しいということと人々の幸せ感とは必ずしも一致しないのはよく聞く話である。

結局、10K はマーケットから船に帰る途中の露天商の土産物屋で使うことになる。長さが 30cm 程、幅 10cm 程の手作りのお面のような置物が 10K、その 1/3 くらいの小さいものは 5K で売っている。10K というと日本円で 300 円くらいになる。

お面は露天商のオヤジが作ったというので、お面の裏には製作者の名前が書いてある。そのオヤジとは目の前にいる真っ黒な顔をした男で、その隣には妻、そして 2 人の子供も一緒にいる。

私は 2 つ合わせて 10K にしてくれと値切るが、なかなか承諾してもらえない。そこで妻が 2 人の子供たちに日本から持ってきた綺麗な包装のクッキーをプレゼントだと言って一つずつ渡す。更に数枚の日本の絵葉書を奥さんに手渡す。子供たちも奥さんも珍しいプレゼントに大そう喜んでいる。これでも 10K にならないかと聞くと、さすがに今度は彼も承諾してくれる。物事をうまくやるには、まずは子供や奥さんを落とすことだ。



第四章 帰国へ

■講演そして赤道通過

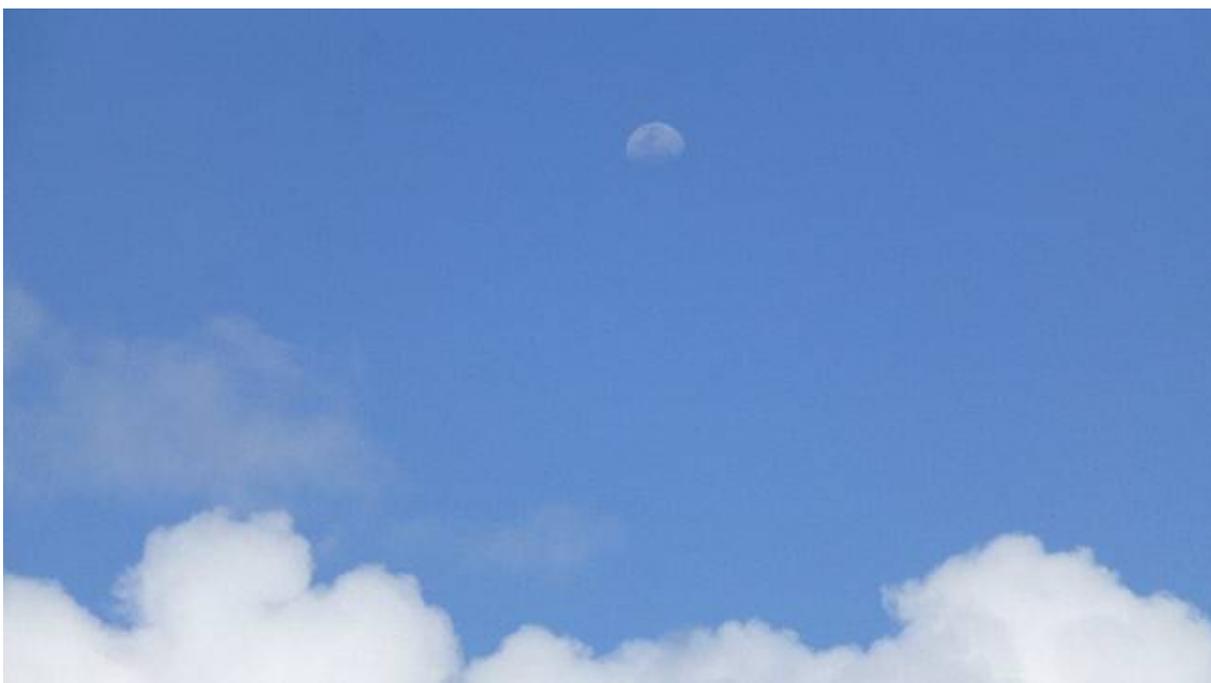
今までの全 5 回シリーズの講演の総集編として「感動の旅」というタイトルで講演をする。立ち見も多くでて最多の 80 人くらい集まったようだ。反応もなかなか良い。

講演が終わると、次はいつですか、名刺をください、もう一度聞きたい等々・・・反響もそれなりにある。講演者冥利に尽きると言ったら言い過ぎだろうが、何か気持ち良い。

航海図には夜 10 時頃に赤道を通過すると書かれている。どおりで暑いはずだ。日差しが突き刺すというのはこういうものかと実感をする。

夕方、と言ってもまだまだ明るい、ぼんやりと海を見ていると半月が目に残る。上弦の月だが、横ではなく縦方向に弓の弦はしなっている。ちょうどお椀をひっくり返して置いたような月が、丸い方を上にして浮いている。

南半球では月の満ち欠けが北半球とは逆になり、その境目の赤道付近では月は上下に満ち欠けする。ここは赤道直下ということを実感する。



■オセアニア祭

2 月 27 日は船全体がオセアニアクルーズの自主企画の総まとめ「オセアニア祭」の一日になっている。

実は 2 日前に船のスタッフからそのために「旅のスズメ」追加講演の緊急依頼があった。全 5 回をまとめたダイジェスト版でいいだろうと簡単に引き受けたが、それでもシリーズ全て聴いてもらっている人に悪いから何かのテーマが必要だろうと思いついて悩んでいた。思案の末に前半は「格安旅行」というテーマにして、後半はダイジェストで乗り切る作戦とした。

ダイジェスト部分のスライドは豊富にあるが、持ち時間は 20 分しかない。後半はスライドの早めくりだ。

聴衆はというと立ち見客もたくさん出て、今までで最大の 100 人くらいは来てくれたらうか、とてもありがたい。

講演が終わるといつものように質問や名刺をくださいという人たちがたくさん現れて、これも嬉しい悲鳴だ。

あとは菊千代一門会の練習と準備だ。これを乗り切れればこのクルーズでの私のイベントは全て終了する。

おっと妻のステージがあり、写真を撮りにいかなければならないことを思い出す。妻はタヒチアンダンスの発表会に参加することになったという。人が足りないので急造のダンサーになったようで数日前から練習していた。

平均年齢の高いダンサーチームながら、なかなか見事なステージに仕上がっている。

私はフラダンスよりもタヒチアンダンスの方が軽快なリズムに乗って明るい感じがするので好きなので、私にとってもありがたい。



■ オセアニ家一門会

2月28日は菊千代一門会、正式にはオセアニ家一門会の発表会の日で、弟子たちは緊張しまくっている。それはそうだろう、初めての舞台というのはもちろん緊張するがダンスやコーラスなどとは全く異なるのが落語だろう。というのは一人で高座に上がるというので誰も助けてくれない。もちろん話を全て覚えていないといけない。結婚式のスピーチのようにカンニングは許されない。

大方の弟子たちは覚えるのに必死の状況だ。この人は最後までしゃべれるのだろうか心配する人も結構いる中で、全員なんとかカンニングも逃亡もなくしゃべり終えることができた。

私の大学時代の感覚では、覚えるのに 100 回はしゃべらないといけない。そこから振りを付けて落語の形にするのに 50 回くらいは必要だ。それをこの高齢者（失礼？）たちが短期間で覚えるのはかなり高いハードルだろうと心配していたが、何人かは徹夜に近い練習をして、何とか乗り切った。

そんな苦労の末に高座に上がって笑いを取る。そんな経験はこの年齢ではまずはありません。改めて拍手を送りたい。



■フェアウエルディナー

横浜帰港 3 日前、夕食はフェアウエルディナーということで正装をしてレストランに行く。

食事サービスが終わるとレストランやホテル部門のクルー全員が入場してきて挨拶と感謝の気持ちを込めて歌を披露するという。登場したクルーの人数は 300 人くらいだろうか、かなりの人数が集まっている。そして We were the world をクルー一人がギター演奏をやって、全員が歌う。インドネシアやフィリピンのクルーが多いが、どちらかと言うと彼らはイタリアやトルコに比べればあまり陽気な方ではない。その彼らが笑顔いっぱいに歌を歌う姿は感動する。

2 年前の地球一周クルーズでも同様なイベントがあつて、予想はしていたがそれでも心が動くのは何故だろうか。それは普段黙々と働いている彼らの姿を見ているからだろう。

感動というのは感謝からも生まれるということを改めて知る。そしてクルーズの終焉という想いがさらに加わったのだろう。



■硫黄島

朝 5 時 30 分、デッキに出てみると水平線の上の方に月がきれいに見える。月明かりが海に反射してキラキラと光っているのが印象的なシーンだ。その反対方向は太陽が昇ろうとしていてうっすらと明るい。



すると船が取り舵をとって大きく方向転換をして、私の視界に三角お結びのような大きな島が見えるようになる。この三角お結びの島こそが南硫黄島で、標高 916m というから海に突き出した山としてはかなり高い。小笠原諸島の一つとしてその手付かずの自然が世界遺産にも登録されているが、無人島なので上陸は難しい。



しばらくすると月は見えなくなり、太陽が主役になってきて太平洋からの日の出ショーの始まりとなる。今まであまり見たこともないショーはとても感動的だ。海から頭を少し出した太陽が、徐々にその姿をあらわし始めて、やがて半円状に、そしてその姿の全てを海の上に出して丸くなる。隣には南硫黄島がそのショーを演出していかのように存在感を示している。



船上では人間たちが太極拳のエクササイズをいつものように始めている。



硫黄島のすり鉢山が見えてきましたという船内放送があり、目の前に大きなすり鉢を逆さにしたような山が見えてくる。硫黄島は基本的には平らな島だが、先端にすり鉢山があるのが特徴的だ。すり鉢山の標高は 170m で他が平らなために際立って見える。それは軍事拠点としてはもってこいの自然環境になっている。島の平らな部分に飛行場を作り、山に管制塔や砲台を置くこと

により遠い彼方まで見渡せる。それはちょうど航空母艦の飛行甲板とブリッジのような役目をはたすからだ。

太平洋戦争末期に大激戦が繰り上げられた理由がよくわかる。この島は日本防衛の要であると同時に、ここを取られればここから飛行機を飛ばされて日本各地を空爆されてしまう。



硫黄島と言われる所以か、島の北側の海岸からは白煙が出ている。遠い沖合にいる私たちが乗っているこの船まで何となく硫黄の匂いが届くような気がする。

そしてこの海域ではクジラが何頭も見ることができ。潮を吹いたり、尾ヒレを見せてくれたりで乗客は大喜びではしゃいでいる。

旅の最後になってクジラも粹な計らいをしてくれる。



■素晴らしい人たち

夜、居酒屋で飲んでいる友人たちに声を掛けられる。一緒にニューカレドニアを旅したNさん、Tさんに加えて豪傑なMさんの3人だ。是非一緒にとということで仲間に加わることにした。

実はこれからスタッフたちによるショーが始まるのだが、これはスタッフのかくし芸大会のような企画で、前回の地球一周の時も最後の企画は同様なもので結構面白かった。しかし今回は親しくなったスタッフも少ないので、こちらの宴会にジョインすることにした。それもこれも豪傑なMさんが熱心に誘ってくれるからで、人に請われることは悪い気はしない。

そして、後から思うとそこに加わったことが大正解だと感じるようになる。3人3様のキャラクターが面白く、更にTさんの人生を聞いたらこれがまた凄い。

Tさんは最初会社勤めをしていたが、30才になった節目で何か全く違う経験をしたくなったという。そこでマグロ漁の船に乗って世界一周に出ることにした。500トンの小さな船で23人しか乗っていない。当然漁師として乗り組むことになり、生まれ始めての漁師、いかつい海の男たちに囲まれて1年間の船旅が始まった。新人だからといって仕事が優遇されることもなく、先輩漁師たちに混じって仕事をする。

胸のところまでくる長靴というかオーバーオールズボンのようなゴムの作業着を着て漁をするのだが、一回の漁が終わるとその作業着の足の部分つまり長靴の底からスネくらいまで大変な量の汗がたまる。終わってから長靴を逆さにすると汗がジャーと出るという。

ケンカや博打は日常茶飯事で、ケンカが始まるととにかく武器になるものを隠すというのも彼の役目になったという。鮫を仕留めるモリのようなもの、料理用の包丁もすぐに隠さないとケンカで使われて危ないからだ。しかしながら素手でも鼻の骨が折れることも、歯が欠けることもよくあるという。船医は乗っていないので次の寄港まで応急手当だけになる。

賭博は、勝ってはいけないという。勝つとカツアゲされ結局は損をする。勝たない負けぬ術を学んだという。

何度も死を覚悟することもあったというが、そんな大変な思いをして1年間でもらった給料は200万円という。当時の船に乗る前の月給が7万円程だということから凄い。さらにマグロと一緒に鮫が取れるが、この鮫は漁師のものになり、中華街の店に卸すと良い値段で買ってくれて、漁師全員で山分けするという。

そんな経験をして陸に上がって再び一般企業に就職するわけだが、31才の彼をある小さな商社が雇ってくれたという。ただし魚臭いというので別の企業との合弁会社に出向になる。そして働いていたのだが、なんと出向元の商社が倒産して彼の勤める合弁会社が多くの人を引き取ることになり、みんな彼の部下になったという。

元々商社マンは優秀で仕事をバリバリこなす、優秀な部下を持った彼はどんどん出世して役員になったという。実際はいくら部下が優秀でもダメな上司は決して出世できるものではない。これも彼の才能や性格、あるいは適用力がそうさせたに違いない。

そういえばTさんがマグロ漁師になると決心したのは30才、それは半還暦にあたる。彼の人生はここでリセット、そして新しい人生が始まることになった。

そんな彼らと日本に戻っても再会しようという話にトントン拍子で決まった。旅は素晴らしい出会いがあるからやめられない。

■横浜帰港へ

本日は荷造りがメインに日になる。船としては昨日がパッキングデーというようことを言っていたが、私たち夫婦は今回のクルーズではあまり荷物を持ってこなかったのが本日だけで充分足りる。

前回の地球一周ではお土産をあまりに多く買ったために持ってきたスーツケースだけでは入らず、最後の寄港地ハワイで大きなスーツケースを買う羽目になった。

問題はそれを宅配便で送ったために、自分たちが自宅に着いた翌々日に土産や衣類が入ったスーツケースが届いたので、帰宅後すぐに家族や近所に土産を配ることもできずに苦勞したことを覚えている。しかも港から送料は全国一律一個当たり2700円と高く、4つ送ると1万円を超えてしまう。港から自宅までタクシーで帰ってもそんなにかからないので作戦ミスは否めない。

今回は荷物を減らし、土産も最低限におさえたので持ってきたスーツケースをコロコロ押して帰ることが出来る。

夕方4時頃、八丈島付近を航行する。八丈島とその隣にある小さな無人島の八丈小島の間を航行するのでどちらに島も大きく見ることが出来る。荷造りも終え、やる事が無くなった乗客たちはデッキにでて写真を撮り、お別れの挨拶をする光景が多くなる。

最後の夜は船内の至る処で宴会が繰り広げられている。私も2件ハンゴして最後の夜を終える。



夜が明けたばかり、朝焼けでまぶしい横浜港に入港する。感じることは前回の地球一周と同じだ。今までの寄港した全ての港に比べてあまりに海が汚い。そして街は成熟していて綺麗だが、落ち着きがあると言えば体裁が良いが、活気が感じられないことだろう。

横浜も他の寄港地と同じような目で見ることになるので、自然で平等な感想だろう。

帰宅して日帰り温泉に行く。出航前に比べて体重増を覚悟して体重計に乗ったが、3kgの減少という結果だ。理由は分からないが体重計が故障していないことを祈りつつも温泉を満喫する。

■まとめ

総航海距離は 16668 海里、つまり 30869km になる。乗船証明書なるものを船が発行してくれて、そこに記載がある。赤道の総延長が約 4 万 km なので地球 3/4 周に当たる。

費用は最初から安く済ませようというのが狙いだったので夫婦二人合わせて約 168 万円、土産も含めて船内、寄港地での飲食費全て込みの費用になる。

そのために窓のない内側のキャビンを選んだ。内側は海側に対して安く、今回は 30 万円程安く設定されている。さらに早期割引は金額の比率で決まるのだが、今回は比率ではなく 30 万円という絶対金額を割引いているので内側が割安になる。窓の有無と早期割引で 60 万円も安くなる。

2 年前に行った地球一周クルーズでは定年退職に対するご褒美と、106 日間もの間で窓がないのもつらいと思ったので海側を選んだが、今回は 56 日間で何とかなるさと割り切った。

費用詳細は以下のとおり。

項目	内容	一人分費用	夫婦合算
出航前 支払い	クルーズ費用 (窓無ツインルーム)	1150000	2300000
	早期割引	-300000	-600000
	世界一周経験者特別割引	-100000	-200000
	リピータ割引	-15000	-30000
	ビザ取得代金	1620	3240
	ボートチャージ費用	28800	57600
	チップ合計	28000	56000
	小計	735000	1470000
船上、現地 支払い	船内費用 (酒、インターネット等)		100659
	寄港地活動費 (電車、食事等)		86510
	土産代		9050
	小計		196219
宅配土産	キウイフルーツワイン6本の宅配注文		14900
総費用			1681119

寄港地は大きく 4 つの地域に分けられる。東南アジア、オーストラリア、ニュージーランド、南太平洋だ。それに沿って旅行記も 4 編に分けた。

船内生活では大きく 2 つ得るものがあった。一つは私の世代やもう少し若い世代の人たちの今後の人生に影響や感動を与えてくれたこと、それはリピータそれも何かを成してきた高齢者が多かったからだ。還暦という人生を生ききり、次の人生を生きる門出という考え方にも相通じる。

もう一つ得たものは、私的には船内で行った旅の講演の手ごたえだろう。

更に付け加えれば、知見が広まったこととして南半球特有の自然で、動物、植物、天体などで海や空の色も印象的だった。

オセアニアは決して期待を裏切らなかった。それどころか期待以上の感動を頂いた。